



いきいき集会 図書委員会

昨日9日(木)は、いきいき集会がありました。今回の担当は、図書委員会でした。図書委員の発表は、おすすめの本の紹介や年間読書冊数目標やクイズなどがありました。

おすすめの本は、低学年では「あいしてくれてありがとう」、中学年では「ことばハンター」、高学年では「探偵チームカッツ事件ノート『ブラック教室は知っている』」と、いずれも面白そうな本でした。

また、年間読書冊数目標は、低学年は100冊、中学年は80冊、高学年は70冊ということでした。この他、クイズなどもあり、楽しい時間になりました。

最後の振り返りでは、発表を聞いていた5年生の児童が「帯西レッド」の心が伸びました。わけは、高学年の冊数の70冊を超えなければいけないという目標ができたからです。」と答えていました。図書委員会の帯西イエローの「役割を自覚する」心によって、子供たちが読書に対して帯西レッドの「目標に向かってやり抜く」心をもって、本に親しみ、帯西ブルーの「感動する心」を味わってほしいと思いました。



クレヨンから無くなった「肌色」

「2000年9月の生産から『肌色』の呼称を『うすだいたい』に変更しました。『肌色』の呼称は、人の肌の色へ固定観念を与える可能性がある」と指摘されていたことから、(中略)和名『うすだいたい』、英名『Light Orange』への変更を決定しました。【出典:三菱鉛筆株式会社】という理由で「肌色」が無くなったのです。

「わくわく通信 NO.29」では、「多様性と共感性の先にある未来」について書いていますが、まずは、身の回りには違いが「いろいろある」ことが「当たり前」ということを大切にしたいと思っています。「肌色」は我々にとっては「当たり前」なのですが、外国に行くと様々な肌の色があり、様々な人種や国籍、あるいは年齢、育ってきた環境があります。だからこそ、自分が当たり前と受け止めてきたこととは違う「背景」を持っている相手に対しても、それを「違う」からといって排除したり、非難したり、いじめたりしてはいけないことを大切にしたいものです。しかも、「当たり前」や「常識」も、日進月歩で変化する時代の中で、時には立ち止まって、これは「当たり前なのか?」と自分に問い直すことも必要かもしれません。

さて、クレヨンから「肌色」が無くなったと書きましたが、実は外国では写真の様に、「肌色セット」が売られています。日本に住んでいると、欧米諸国のように日常的に様々な肌の色をした人と関わるようなことは、そう多くありません。この色鉛筆のセットから、肌色といっても「いろいろある」ことがわかります。「いろいろある」のが当たり前、それが多様性の基本です。

